

観光インフラの整備動向に基づく周辺地域への波及効果に関する研究
—熊本県阿蘇郡南小国町黒川温泉地区の観光地形成過程に関する研究—

正会員 ○馬場翔太郎^{*1} 同 姫野由香^{*2} 同 宇土沙希^{*1} 準会員 吉本怜真^{*3}

7.都市計画—3.市街地変容と都市・地域の再生 都市計画

観光まちづくり ライフサイクル 観光インフラ 温泉観光地

1 研究の背景と目的

2015 年に各国政府は「持続可能な開発目標(SDGs)」とともに「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」を採択し、持続可能な観光はその中に位置づけられた¹⁾。日本においても、2018 年に「持続可能な観光推進本部」が観光庁に設置され、2020 年には「日本版持続可能な観光ガイドライン(JSTS-D)」が策定されるなど、地域資源を活用した持続可能な観光まちづくりが全国各地で推進されている²⁾。

観光は地域経済の活性化に寄与する一方で、無秩序な開発や過度な観光地化によって、地域住民の生活環境の悪化や地域景観の喪失といった問題を引き起こす可能性がある。

川井ら³⁾は、観光地化に伴う宿泊施設の急増により、住民にとって必要な店舗が宿泊施設に転換され、住民の立ち退きを引き起こしていることを指摘している。また、西川ら⁴⁾は、観光地化の進展に伴い、店舗構成が住民向けから観光客向けへと変化したことに加え、観光地における老舗商店の減少が著しいことを明らかにしている。

したがって、持続可能な観光地形成のためには、観光地の発展を一時的な現象としてではなく、その形成過程を長期的な視点から捉える必要があるといえる。

熊本県阿蘇郡南小国町の黒川温泉地区は、観光地として発展する過程においても、地域主体による自立的な観光まちづくりを通して、地域景観の保全や地域の生活文化の継承を図ってきた⁵⁾。特に 1980 年代以降は、旅館組合を中心とする地域主体^{注 1)}が協働し、統一感のある景観形成や入湯手形の導入など独自の取り組みを進めてきた。その結果、地域全体で「一つの旅館」を形成するという理念のもと、地域ブランドとしての価値を確立したとされる⁶⁾。

黒川温泉に関する既往研究として、浦⁷⁾は、黒川温泉

観光旅館協同組合や旅館事業者にヒアリング調査を行い、黒川温泉中心部における小規模旅館の分布と収容定員の変化を明らかにしている。また、光永ら⁸⁾は、エピソード記述法を用いて、黒川温泉における景観整備や施設整備などの観光まちづくりに関する推進体制の変化を明らかにしている。しかし、宿泊客数や入湯税などの観光地の価値を示す指標の変遷や、宿泊施設や道路といった観光地空間の整備動向に着目し、観光地の形成過程とその周辺地域への影響を長期的な視点から明らかにした研究は確認できない。

そこで本研究では、黒川温泉地区を対象として、同地区における観光地形成の過程と、それが周辺地域に及ぼした影響を明らかにすることを目的とする。

2 研究の方法と対象

2-1 研究の方法

長期的な視点から観光地の形成過程を分析するために、観光地の発展と衰退にみられる周期的な推移を説明する仮説⁹⁾¹⁰⁾と観光地の価値論¹¹⁾を用いて、黒川温泉地区における観光地としてのライフサイクルを把握し、同地区における観光地形成の過程を明らかにする(3 章)。

次に、ライフサイクル各期間における黒川温泉地区およびその周辺地域の宿泊施設や道路などの観光インフラの整備動向を分析し、黒川温泉地区における観光地形成が周辺地域に及ぼした影響を明らかにする(4 章)。



図 1 南小国町における黒川温泉地区

A Study on the Ripple Effects to Surrounding Areas Based on Tourism Infrastructure Development Trends

—A Study on the Tourism Destination Formation Process in the Kurokawa Onsen Area, Minamiosono Town, Aso District, Kumamoto Prefecture—

BABA Shotaro, HIMENO Yuka, UTO Saki, YOSIMOTO Ryoma

2-2 研究対象地

黒川温泉地区は、熊本県阿蘇郡南小国町の東部に位置し、阿蘇くじゅう国立公園に近接する温泉観光地であり、1980年代後半以降、観光地として急速に発展してきた。同地区は、山間部の川沿いに形成されており、約50haの範囲の中に旅館、小売店、飲食店などの観光関連施設が集積している。また、周辺に鉄道駅や高速道路がなく、交通の利便性が低いため、観光客の移動手段は自家用車や観光バスが中心となっている。さらに、黒川温泉は満願寺温泉、田の原温泉、小田温泉、白川温泉とともに南小国温泉郷^{注2)}として国民保養温泉地に指定されている(図1)。本研究では、この範囲への波及効果を明らかにする。

3 黒川温泉地区における観光地としてのライフサイクル

黒川温泉地区における観光地形成の過程を明らかにするため、同地区の観光地としてのライフサイクルを、観光地の価値の変遷と取り組みの変遷に着目して分析する。観光地の価値については、観光需要の時系列的な推移を示す宿泊客数、温泉地の利用実態を示す入湯税、および観光地の収容力を示す宿泊施設の総客室数を用いる。また、取り組みの変遷については、施設整備や計画策定といった身体的価値^{注3)}に関わる取り組みと、イベントや賞の受賞など精神的価値^{注3)}に関わる取り組みに区分して整理する。以上の2つの観点から、黒川温泉地区における観光地としてのライフサイクルを特定した(表1)。

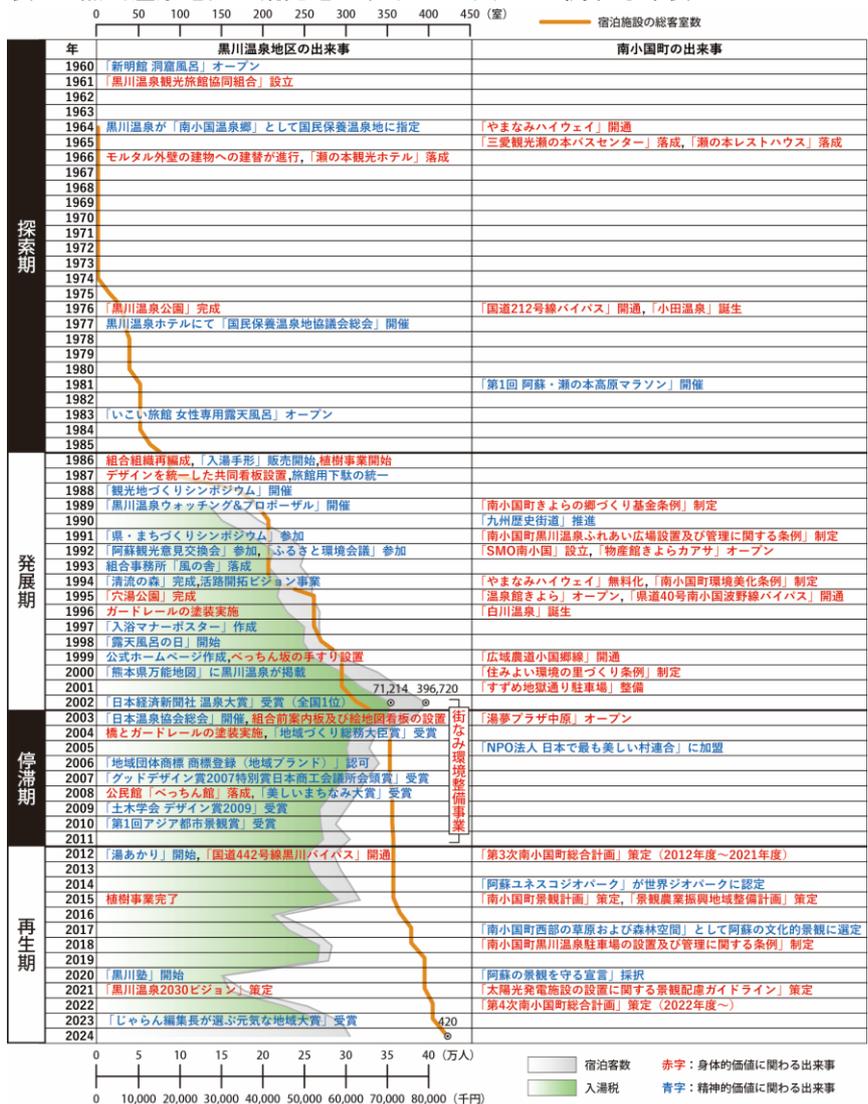
【探索期】やまなみハイウェイや国道212号線バイパスの開通などの身体的価値の向上に関わる出来事に加え、国民保養温泉地への指定など、精神的価値の向上に関わる出来事も確認できる。また、観光まちづくりの中心的役割を担う黒川温泉観光旅館協同組合が設立されたのもこの時期である。

【発展期】86年の組合組織再編成を

契機に、黒川温泉地区では、植樹事業や共同看板の設置といった身体的価値を高める取り組みが本格化したことに加え、入湯手形の販売や旅館用下駄の統一など精神的価値を高める取り組みも行われた。広域的には、SMO 南小国設立や南小国町環境美化条例、住みよい環境の里づくり条例の制定など、身体的価値の向上を図る取り組みが行われた。こうした取り組みの結果、2002年には宿泊客数・入湯税がともに最大を記録した。さらに、この時期には、宿泊客数の増加に伴う宿泊施設の総客室数の著しい増加が確認できる。

【停滞期】宿泊客数や入湯税はピーク時に比べ、やや減少傾向ではあるが、街なみ環境整備事業の実施など、地域主体に加えて、行政との協働が本格的に始まった時期である。2004年以降は、地域づくり総務大臣賞、美しいまちなみ大賞などを受賞し、これまでのまちづくりの成果が高く評価された。つまり、街なみ環境整備事業

表1 黒川温泉地区の観光地のライフサイクルに関する年表



実施による身体的価値の向上とともに、受賞による精神的価値の向上にも努めた時期である。

【再生期】国道 442 号線黒川バイパスの開通やライトアップイベント「湯あかり」の開始を契機に、減少傾向にあった宿泊客数と入湯税が回復し始めた時期である。2016 年の熊本地震や 2020 年以降の新型コロナウイルス感染症の影響により、一時的に宿泊客数と入湯税は減少したものの、数年のうちに再び回復に転じた。また、黒川温泉 2030 ビジョンや第 4 次南小国町総合計画などの策定により、新たな観光需要や地域資源の活用に向けた方向性が示された時期でもある。しかしながら、宿泊客数や入湯税は停滞期の平均値に達しておらず、現在の黒川温泉地区は停滞期から再生期に向かう途中であると考えられる。

4 観光インフラの整備動向からみる周辺地域への影響

黒川温泉地区における観光地形成が周辺地域に及ぼした影響を明らかにするため、前章で把握したライフサイクルの各期間における宿泊施設^{注 4)}、道路^{注 5)}、観光資源^{注 6)}などの観光インフラの整備動向を分析する。宿泊施設は 3 つの営業種別、道路は 4 つの道路種別ごとに整理し、観光資源とあわせて各期間における立地をプロットした(図 2)。

【探索期】この時期における主要道路は、国道 442 号線と県道 317 号線、および当時県道に指定されておらず有料道路であったやまなみハイウェイに限られていた。つまり、この時期は道路網が限定的であり、アクセスの観点からみても観光地形成過程の初期段階にあったといえる。また、宿泊施設の営業種別をみると、ほとんどが旅館・ホテルであり、立地については国道 442 号線および県道 317 号線沿いに立地していることが確認できる。さらに、立地が確認できた 13 件の内 6 件が黒川温泉地区に立地していることから、この時期は、南小国町において限られた道路網のもとで、黒川温泉地区を中心とした観光地形成が始まった時期である。

【発展期】県道 40 号線と広域農道小国郷線の開通、および県道指定に伴うやまなみハイウェイの無料化によって、黒川温泉地区へのアクセス性が大幅に向上した。こうした道路網の拡充を契機として、黒川温泉地区だけでなく、小田温泉地区においても宿泊施設が急増したことが確認できる。また、1994 年に整備された公園「清流の森」の周辺においても、旅館・ホテルや簡易宿所が新たに立地しており、温泉郷の範囲外へ宿泊施設の立地が拡大したことがわかる。さらに、この時期には、黒川温泉観光旅館協同組合の事務所「風の舎」が落成し、

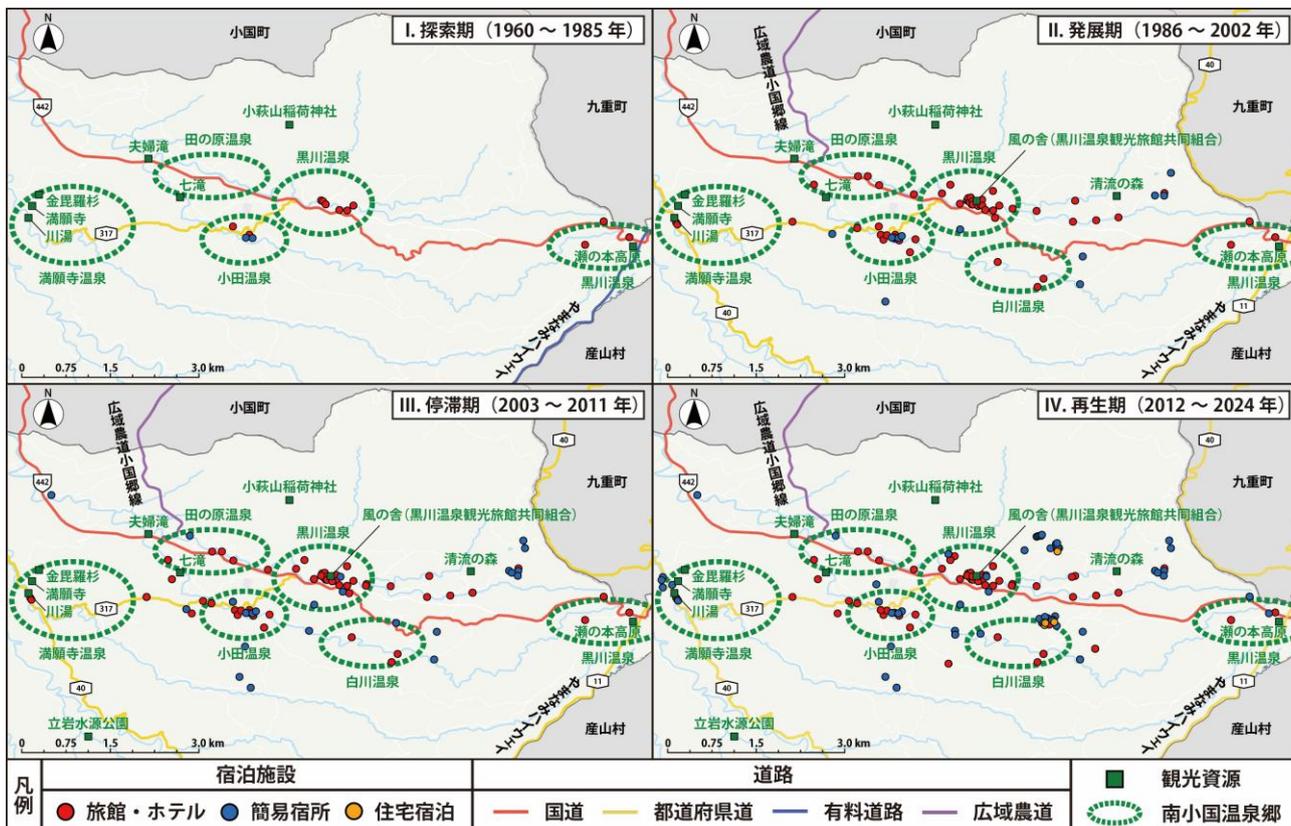


図 2 ライフサイクルの各期間における観光インフラの整備動向

観光情報を発信する観光拠点が整備されたことで、黒川温泉地区における観光客の受け入れ環境が更に向上している。

【停滞期】発展期から停滞期にかけて道路整備には大きな変化が見られない。同様に、宿泊施設についても、発展期のような急激な増加はみられないが、温泉郷の範囲外において旅館・ホテルや簡易宿所が新たに立地する傾向が確認できる。また、黒川温泉地区では 2002 年から 2011 年まで街なみ環境整備事業が行われ、国道 442 号線沿いの修景やその周辺の遊歩道の整備がなされた。つまり、この時期は宿泊施設の新規開発は停滞したものの、既存の観光インフラを維持しつつ、黒川温泉地区区内でたゆまず環境整備を行うことにより、その魅力を高めた時期であると考えられる。

【再生期】国道 442 号線黒川バイパス開通に伴う道路線形の直線化によって、黒川温泉地区へのアクセスが一層改善された。宿泊施設については、黒川温泉地区の外側や白川温泉地区周辺の一部のエリアにおいて、簡易宿所や住宅宿泊の急増が確認できる。これは、新型コロナウイルスの収束やインバウンドの増加による近年の新たな観光需要に伴うものであると考えられる。しかし、南小国町では景観計画、黒川温泉地区では黒川地区街づくり協定が存在するものの、南小国町は農業地域、森林地域、自然公園地域であるため、都市計画マスタープランは策定されていない。そのため、黒川温泉地区周辺では、建物用途や立地を規制・誘導する都市計画上の枠組みは十分に整備されていないといえる。こうした状況から、宿泊施設の立地が自治体の管理の及ばない形で進行する可能性があり、黒川温泉地区周辺の予期せぬ観光開発により地域景観が喪失する懸念がある。

5 総括

本研究では、黒川温泉地区を対象として、観光地の価値の変遷と取り組みの変遷を分析することで、黒川温泉地区の観光地としてのライフサイクルを把握した。その結果、黒川温泉地区の観光地としてのライフサイクルは、探索期・発展期・停滞期・再生期の 4 つの期間に分けることができ、黒川温泉地区では、探索期や発展期だけでなく停滞期においても、継続的に身体的価値

を向上させる環境整備を行うことで、観光地としての魅力を高めてきたという特徴がみられた。

また、各期間における黒川温泉地区およびその周辺地域の観光インフラの整備動向を分析した結果、探索期に黒川温泉地区を中心とした観光地形成が始まり、それが発展期以降の道路網の拡充とともに周辺地域へ波及したことが確認できた。さらに、再生期には、黒川温泉地区の外側や白川温泉地区周辺の一部のエリアにおいて、簡易宿所や住宅宿泊が急増したことが確認できた。このことから、黒川温泉地区の発展は周辺地域の観光地化を促進する一方で、黒川温泉地区周辺の予期せぬ観光開発により地域景観が喪失する可能性が考えられた。

【補注】

- 注1) 黒川温泉観光旅館協同組合、自治会、旅館事業者、地元住民などを指す。
- 注2) 図 1 および図 2 の各温泉地の範囲については、南小国温泉郷国民保養温泉地計画書内の南小国温泉郷位置図を参考とした。
- 注3) 安島博幸の観光地の価値論によると、観光地の価値には、身体に感じる快感を伴うものである、気候風土や自然資源などの消費されにくい「身体的価値」と、興味や関心を強く惹かれる場所や話題性など、時間経過とともに消費されやすい「精神的価値」の大きく 2 つがあるとされている。
- 注4) 熊本県阿蘇保健所「旅館業届出施設一覧」と熊本県「住宅宿泊事業届出者情報一覧」により、宿泊施設の所在地および営業種別を調査した。
- 注5) 国土地理院「地図・空中写真閲覧サービス」により、道路形状および道路種別を調査した。
- 注6) 南小国町公式ホームページ「観光情報」により、観光資源の所在地を調査した。

【参考文献】

- 1) UNWTO(2015)「観光と持続可能な開発目標」https://unwto-ap.org/wp-content/uploads/2019/06/Journey_to_2030-highlights_low.pdf
- 2) 観光庁・UNWTO 駐日事務所(2020)「日本版持続可能な観光ガイドライン(JSTS-D)」<https://www.mlit.go.jp/kankochu/content/810000951.pdf>
- 3) 川井千敬, 阿部大輔(2018)「京都市東山区における簡易宿所営業の立地動向とそれによる地域への影響について」都市計画論文集, Vol.53, No. 3, pp.1253-1258
- 4) 西川亮, 陳斐然(2025)「歴史的町並み保存地区における老舗商店による観光地化への対応実態に関する研究—川越一番街を事例として—」都市計画論文集, Vol.60, No.1, pp.37-45
- 5) 黒川温泉観光旅館協同組合(2012)「黒川温泉観光旅館協同組合設立 50 周年記念誌 KUOKAWA 軌跡 The Story of Sustainable Development」
- 6) 黒川温泉観光旅館協同組合(2018)「黒川温泉とは」<https://www.kurokawaonsen.or.jp/about/>
- 7) 浦達雄(2010)「最近の黒川温泉における小規模旅館の動向」温泉地域研究, 第 15 号, pp.1-10
- 8) 光永和可, 田中尚人(2019)「黒川温泉の観光まちづくりにおける協働に関する研究」土木学会論文集, Vol.75, No.5, pp.429-439
- 9) R.W.Butler, The concept of tourism area cycle of evolution implications for management of resourcers, pp5-12, Canadian Geographer Vol21, No.1, 1998
- 10) 毛利公孝, 石井昭夫(2002)「観光地の発展周期に関する考察:観光資源管理のための一視点 翻訳:観光地発展段階の基礎理論」立教大学観光学部紀要, 第 4 号, pp.98-103
- 11) 安島博幸(2014)「観光地の価値の生成過程に関する理論的考察」日本観光研究学会全国大会学術論文集, pp.285-288

*1 大分大学大学院 博士前期課程
*2 大分大学 准教授・工博
*3 大分大学 理工学部

Graduate Student, Oita Univ.
Associate professor, Faculty of Science and Technology, Oita Univ, Ph.D
Undergraduate Student, Oita Univ.